
笑顔と情熱

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

笑顔と情熱

【Nコード】

N5016I

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

戦争が終わって暫くして。龍一は漫画家を志して上京した。そこには彼の終生の同志となる康平がいた。二人の漫画への情熱のもとになっているものとは。漫画創成期のお話です。

第一章

笑顔と情熱

彼は漫画家である。若い頃から、いや物心ついた時からいつも何かを描いていた。

「また描いてるの?」

「うん、そうだよ」

うんざりとした口調の母親に対しても平気な顔で描きながら答える。

「ちよつとね。兵隊さん描いてるんだよ」

「兵隊さんつてもう軍隊もないのに」

「あれっ、そうだったの」

「あれはええと」

ここで母親は己の記憶を思い出し。そのうえでまた言うのだった。

「警察予備隊だったかしら」

「お父さんが今いるところだったよね」

「そうよ。今はそこにいるわ」

実は急にできたばかりなので夫の勤務先であつても忘れていたのである。時代はまだそんな状況だった。何かと忙しい頃だったのだ。

「そこにね」

「何だったっけ。大尉だったよね」

「ええと、確か」

また記憶を辿ることになった。彼、小此木龍二の父は海軍にいたのだ。そこで戦闘機のパイロットをやっていた。彼にとつても母親、つまり妻から見ても自慢の父であり夫であつた。

しかし時代は変わって海軍はなくなり警察予備隊になっていた。

それまでは普通に働いていた龍二の父も警察予備隊ができてすぐにそこに入ったというわけなのである。

「今は一尉だったかしら」

「一尉って何なの？」

「さあ。大尉にあたるらしいけれど」

母親にもその違いがわからなかったのである。

「何でも今はそう呼ぶらしいわね」

「そうなんだ」

「そらしいわ。とにかく兵隊さんを描いてるのね」

「他にも描いてるよ」

見れば小さな男の子や女の子も描いている。確かに色々描いている。他には四角いロボットや車といったものも描いているのだ。た。

「どうかな、これ」

「いいんじゃないの？」

少し見るとわりかしいい感じだったので素直に褒めたのだ。

「それで」

「そう。じゃあもつと描くね」

「野球選手も描いてるのね」

「うん、青バットね」

当時セネターズというチームがありその看板選手だった大下弘である。後に西鉄ライオンズの主砲にもなる一世を風靡した名選手だ。

「大下選手好きだから」

「赤バットの川上選手は描かないのね」

「だって巨人嫌いだもん」

だから描かないというのだった。

「巨人以外なら何でも描くよ」

「そうなの。じゃあ大きくなったら絵描きさんになるのね」

「うっん、漫画家になるよ」

しかし彼はここでこう言うのだった。

「漫画家になるんだ、絶対にね」

「漫画家って」

当時漫画家といつてもその地位も評判も決していいものではなかった。母親も自分の息子が漫画家になると聞いて眉を顰めざるを得なかった。

「それより兵隊さんになった方がいいんじゃないの？」

「兵隊さんは兄ちゃんになるんでしょ？」

しかし龍二はここでこう反論した。

「だったら僕が兵隊さんでなくていいじゃない」

「あんたもなつたら余計にいいと思うけれど」

「だって僕兵隊さんになりたくないから」

これが彼の本音であった。

「だから漫画家になるんだ。絶対にね」

「そういえば最近手塚治虫って人がいるらしいわね」

丁度出て来た頃である。漫画界にその名を残す異才の名が出て来た頃なのだ。何もかもが黎明期にある、そんな時代であった。

「面白いのかしら」

「うん、面白いよ」

龍二は手塚治虫の話が出たところですぐに答えた。

「とてもね。面白いよ」

「そうなの。じゃあ一度読んでみようかしら」

「僕絶対手塚治虫先生みたいな漫画家になるんだ」

彼はこのことを誓うのだった。

第二章

「絶対にね」

これが彼の子供の頃のことだった。それから彼は小学校でも中学校でも高校でも漫画を描き続けた。そうして高校卒業と同時に上京してある編集部に自分が描いた漫画を持ち込んだのである。

編集室は活気に満ちていた。机の上はあれやこれやと原稿やら何やらで一杯であり誰もがせわしく働いていた。彼はその編集室の端の応接場所である編集者にその漫画を見てもらったのである。

編集者は若い男だった。髪は収まりの悪い黒髪で伸ばしている。目は優しげで僅かだが垂れている。眉は黒く太めだ。そして何よりもそのにこりとした口元が印象的だ。

彼は龍二を見てまず。こう言ったのだった。

「ええと、持ち込みだよね」

「はい、そうですけれど」

「そうなんだ」

その彼の細長い精悍な顔と吊り上がった細い眉、それにまるでウ二の様に収まっていないあちこちに尖った髪を見て。こう言ったのだった。

「ボクサーじゃなくて」

「いえ、違います」

龍二ははつきりとこのことは否定した。

「俺漫画家になりたいんですけれど」

「そつだよね」

編集者も彼のその言葉を聞いてまずは納得した。

「ええと、まずは僕の名前はね」

「松崎さんですか？」

龍二の方から名前を出してきた。

「週刊マガデーの松崎さんですよね」

「あれっ、知ってるの？」

その編集者松崎康平は彼の言葉に思わず目を丸くさせた。

「僕の名前」

「だってあれですよ。いつも編集ページに名前と似顔絵あるじゃないですか」

「ああ、そこまで見ていたんだ」

康平は龍二のその言葉に感心さえした。

「凄いね。普通そこまで目を通さないよ」

「漫画は読んだら全部見るんです」

龍二ははつきりとこう答えた。

「だって大好きですから」

「そうか。だからなんだね」

「はい」

これまたはつきりと答えるのだった。

「そうです。絶対に全部」

「そうだったんだ。それにしても君」

今度は彼全体をまじまじと見ての言葉だ。

「大きいねえ。一八〇ある？」

「一八一です」

身長についてもはつきりと答えるのだった。

「それだけあります」

「僕も一七九あるけれどね」

見れば康平にしるかなりの大きさであった。

「それよりもまだ大きいなんてね」

「何か背は無闇に大きくなったんですよ」

自慢とも謙遜とも取れない言葉であった。

「まあそれは気にしないで下さい」

「わかったよ。じゃあそうさせてもらっね」

「はい、それで御願います」

「それで漫画だけねど」

康平はその漫画を読みながらまた龍二に話すのだった。

「いいね。面白いよ」

「本当ですか？」

「今雑誌に空きがあるからね。載せさせてもらおうよ」

「そうですね。それじゃあ」

「ただ。君今何処にいるんだい？」

「ここでこのことを康平に尋ねてきたのであった。」

「見たところ学生服のままだけれど」

「高校卒業してすぐに出て来ました」

「彼はそのままありのままに話した。」

「それでここに持ち込みに来ました」

「つてことはあれだよ」

康平はこの言葉からすぐに察したのであった。

「今お金も住む家もないよね」

「はい」

「またしても素直に答える龍二だった。」

「何も考えていませんでした」

「ひよつとしてここに来るまでに!？」

康平は龍二のその無鉄砲さにあらためて驚いていた。

「そうしたことは考えていなかったっていつのかい!？」

「漫画のことだけ考えていました」

「これが龍二の考えていた全てのことだった。」

「それだけを考えて来ました」

「いや、凄いねそれは」

康平は皮肉ではなく素直にこう言った。首を捻ってはいたが。

第三章

「そこまで漫画のことを考えているんだ」

「それしか考えられなかったのだから」

「よし、わかったよ」

康平は彼の言葉を聞いたうえで頷いた。

「それじゃあ。お金も部屋も提供してくれる場所を紹介するよ」

「何処ですか？それは」

「住み込みのね。アシスタントの募集があるんだけど」

彼が紹介するのはこれだった。

「ほら、あの某先生」

「某先生ですか」

「そう、あの人が今アシスタントを募集しているんだ」

その某先生とはまさにこれからの漫画界をしょって立つとまで言われている巨匠だ。既にその名声は手塚治虫に匹敵するものになっている。

「そこに住み込みでどうか」

「あの先生のアシスタントですが」

龍二はそれを聞いてもまずは現実だとは思えなかった。そしてついつい康平に対してこう尋ねるのであった。

「嘘じゃないですよ」

「僕が嘘をついたら君住む場所がないんじゃないのかい？」

おかしそうに微笑んで龍二に返した。

「そうじゃないのかい？それは」

「それはそうですけれど」

「まさか実家まで歩いて帰るわけにはいかなししね」

「はあ」

「本当だよ。僕から先生に話をしておくからね」

「じゃあ本当に」

やはり彼にとってはまだ夢のような話である。しかしそれでも康平の言葉が嘘ではないことは彼の話ぶりから次第にわかってきたのであった。

「あの先生のアシスタントに」

「修行の意味もあるよ」

康平はまた言い加えてきた。

「だから。頑張ってね」

「わかりました。じゃあ俺」

一本気な調子で述べる。

「最高の漫画家になります。子供達を喜ばせるような」

彼はその漫画家のアシスタントになった。そうして一年後正式にデビューすることができた。担当は康平がなった。すぐに週刊連載だったが彼の体力は物凄いものだった。

「えっ、もう描いたの？」

「はい、どうぞ」

康平が原稿を見に彼のアパートに向かうともうその原稿が完成していた。テレビも冷蔵庫も洗濯機もなくただ机だけがあるその部屋で彼はただひたすら漫画を描いていた。

「それで今増刊の読みきり描いています」

「そっちも描いてるんだ」

「それでその原稿どうですか？」

康平に渡したその原稿の出来を尋ねるのだった。

「そっちは。どうですか？」

「そっだね」

彼はその原稿を一枚一枚読みだした。そうしてそのうえで答えるのだった。

「いや、かなりいいね」

「そうですか」

「いけるよ。じゃあこれはこのまま受け取っておくね」

「はい、御願います」

「それで次はその読みきりで」

康平はもう平らになり果ててしまった座布団に座りながら描き続けている龍二に対して言う。彼の机にはGペンや消しゴム、それに羽根がある。どれも漫画の道具だ。

「あとは月刊誌の連載もあつたよね」

「それも描きますよ」

彼は鼻息も荒く康平の言葉に応える。

「もうどんどん描いていきますよ」

「描くのはいいけれど身体は大丈夫かい？」

康平は怪訝な顔で彼に問うのだった。

「確か今一月に二百ページだったよね」

「いえ、三百ページですよ」

にこりと笑って康平に言う龍二だった。

「また連載増えましたし」

「大丈夫かい？」

康平は思わず彼に問うてしまった。

「それだけ沢山描いて。夜だって殆ど寝ていないんだろっ？」

「けれどあれじゃないですか」

しかしここで龍二は言うのだった。

第四章

「手塚先生だつてそれ位描いていますよね」
「まあね」

それは事実だった。この当時の巨匠と呼ばれる漫画家はそれだけの量を描いていたのである。だから藤子不二雄にしても石ノ森章太郎にしてもその作品量はかなりのものになっているのだ。彼等はまさに漫画に対して全てを賭けていたのである。命までも。

「じゃあ俺だつて」

「また何でそこまでやれるんだい？」

康平はまた思わず彼に言ってしまった。

「そこまで。漫画を描くことが好きにしても」

「ええ、それはですね」

「うん」

「皆笑顔になつてくれるからですよ」

こう言うのだった。彼もまた屈託のない笑顔になつて。

「だからですよ。描けるんですよ」

「笑顔つて？」

「はい、子供の笑顔です」

これが彼の言葉であった。

「それがあるからこそです」

「そう、子供の」

「だから描くんですよ」

鼻息は荒いままであった。

「今もこれからも」

「そうか。だからか」

「やっぱり嬉しいじゃないですか」

屈託のない笑顔もそのままだった。心からそれが嬉しい顔であった。

「そうやって皆が俺の漫画で笑ってくれるってことが」

「わかったよ。じゃあ頑張ってくれ」

「はい、描きます」

彼は言い切った。

「これからもずっと」

こう言って彼は描き続けるのだった。そんなある日のこと。二人が漫画の打ち合わせで喫茶店で話をしたその帰りだった。街の本屋の前を横切ったその時である。

「あつ、週刊マガデー読んでますよ」

「そうだね」

康平は龍二のその言葉に頷いた。

「読んでるね、皆で」

「ほら、俺の漫画読んでますよ」

龍二は今度は自分の漫画のページが開かれていることを確認して言った。

「俺の漫画、ほら今」

「ああ、そうだね」

康平もそれを見て頷く。

「楽しそうに読んでるね」

「いや、嬉しいですよ」

その子供が自分の漫画を読んで笑っているのを見て彼も笑みを浮かべた。

「ああして読んでくれて笑ってくれて」

「だからこそ描くんだったね」

康平はその龍二に対して問うてきた。

「君は。だから」

「はい、これからもずっとですよ」

そしてまたこう言うのであった。街中でも。左手はノートを持っていて塞がっているが右手は空いている。その空いている右手でガッツポーズをしながらの言葉だった。

「描いていきますから」

「そうだね。じゃあ僕は」

「康平さんもやっぱり」

「子供の笑顔を何時までも見たいね」

彼もまたそれは同じなのだった。

「やっぱり」

「そうですね。だから俺描きますよ」

「また帰ったら描くのかい」

「当たり前じゃないですか」

熱い言葉で語るのだった。

「だから俺漫画家なんですよ」

「そこまで言えるのが凄いよ」

康平はそんな彼の言葉を聞いて唸るようにして言うのだった。

「そうストレートに言えるのがね」

「そうですね」

「うん。今子供が読んでるけれど」

龍二のその漫画を読んでいる子供は実に楽しそうに笑っている。

それを見ながらの言葉であった。康平のその目は実に温かいものであった。

「面白いと思ってるね」

「ええ、それが最高に嬉しいんですよ」

今にも小躍りせんばかりの龍二だった。

第五章

「描きがいがありますよ」

「じゃあその心を忘れないことだよ」

康平の言葉はまるで彼のその肩を叩くかのようだった。

「絶対にな」

「はい、俺ずつと描きますよ」

また拳を作つての言葉だった。

「何があつてもね」

今それを固く誓うのだった。これが二人の若き日のことだった。

そして歳月が流れ。彼等は歳を取った。康平は大人向けの雑誌の編集長になっていた。龍二はその雑誌に連載を持っていた。二人の付き合いはそのままであつた。

今二人は雑誌の企画で対談をしていた。普通対談といえは料亭や若しくは出版社の編集部で行われる。しかし二人は今はその喫茶店で対談をしていた。

二人が若き日に仕事の打ち合わせをしていたその店の中でコーヒーを飲みながら。そのうえで二人で対談を行うのであつた。

まずはコーヒーを飲み。それから言った。

「ここは変わらないね」

「そうですね」

龍二が笑顔で康平に答える。二人の顔には皺が目立ってきていた。髪もやや薄くなり白くもなっている。そして康平は少しばかり太ってしまっていて龍二も眼鏡をかけていた。

しかしその声の調子は変わらない。あの時と同じである。

「このコーヒーもね」

「親父さんは隠居したんだつたつけ」

「みたいですね」

また話す龍二だった。

「それで息子さんが跡を継いでコーヒー淹れてるんですよ」

「そうなんだ。それはいいことだね」

康平はそれを聞いて納得した顔で頷いた。

「何か色々なものが変わったけれどね」

「そうですね。俺達も変わったし」

「いや、君は全然変わってないよ」

康平は明るい声で彼に告げた。

「もう全然。あの時のままだよ」

「そうですね？」

だが龍二はその言葉には首を傾げて笑うだけだった。見ればその顔は皺が目立ってはいるがそれでも若々しさは健在だった。

「それは」

「そうだよ。僕なんかこんなに老けたのに」

「編集長だつて変わらないじゃないですか」

「そうかな」

こう言われても実感の沸かない康平だった。

「だといいいけれどね」

「はじめて会つてそれで担当になって」

「うん」

「あの時はガムシヤラに描いてましたよ」

「僕もね。漫画が好きでとにかく皆に読んでもらいたくてね」

その時の気持ちをほつきりと言うのだった。

「もう必死だったよ」

「子供がそれを読んでくれるの見て凄く嬉しかったですよね」

「そうそう」

満面の笑顔での今の康平の言葉だった。

「あの時に誓ったよね。子供の笑顔を見たいって」

「その子供のファンレター今も来ますよ」

「あつ、今も？」

「この雑誌の読者さんですよ。大人になってくれても俺の漫画読ん

「でくれてるんですよ」

「そうか。あの時の子供達が大人になったんだね」

康平はこのことを感じて目を温かくさせた。確かに歳月は経ったがそれでもだった。そこにあるものはずっとそのままだったことを知ったのだ。

「いや、それで今も読んでくれてるんだ」

「それで俺今もマガデーとかテレマガくんにも描いてますけれど」
相変わらず筆が速い彼である。

「今の子供達からもファンレター来ますよ。面白いつて」

「今の子供達からもなんだ」

「そうなんですよ。時代は変わってますけれどね」

変わったところではなかった。この店の外にしろ最早別世界である。彼等の若い頃にあったあの大きなブラウン管のテレビも黒電話もない。何もかもが変わっていた。

「それでも。皆読んでくれてますよ」

「そうなんだね。今の子供達も大人になった人達も」

「はい、読んでくれてるんですよ」

龍二がそれが最高に嬉しいのであった。言葉にもはっきりと出ている。

「今も」

「それで笑ってくれてるんだ」

こころ思うと康平は。言わずにはいられなかった。

「じゃあ僕達もまだまだ頑張ろうか」

「俺はずっと描きますよ」

龍二は若い頃からのガッツポーズをここでも見せた。

「これからもね」

「僕もこれから頑張っていくか」

康平も龍二の言葉に応える形でまた満面の笑みを浮かべた。

「子供達の笑顔を見たいからね」

「漫画ってそうですよね」

龍二は漫画についても言った。

「やっぱり。その心を楽しませるものですよね」

「ジャンルは色々あるけれどね」

それこそホラーもあれば悲劇もある。これはもう二人共承知していることだ。だがそうしたこととも全て含めて楽しませると表現したのである。

「それでも。やっぱりね」

「はい、楽しんでもらいましょう」

この気持ちはまさに不変であった。

「これからもずっと」

「その通りだね。じゃあ今日は」

「はい、また帰って描きます」

奇しくもあの若い時と同じ言葉であった。

「もう死ぬまで描きますよ」

「僕も漫画の為にまだまだ働くか」

康平もそのつもりだった。

「定年になってもね」

「定年なんてないですよ」

龍二がそんなことを気にする筈もなかった。

「もうね。ただ一直線に描いていくだけですよ」

「ブログとかサイトで紹介していいのかな」

康平も時代は感じていた。だからここでは現代の技術を話に出した。

「そうやってこれからも」

「俺も自分のサイト持ってますしね」

気の若い龍二ならではだった。

「ブログも」

「じゃあそういうものも使って」

「はい、やっていきましよう」

強く誓い合った対談であった。二人の漫画への情熱は不変だった。

時代が変わっても笑顔と情熱は変わらない。彼等も子供達も。

笑顔と情熱

完

2009・6・23

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5016i/>

笑顔と情熱

2010年10月8日15時26分発行